

## 「パレスチナ問題から考える教育」

半沢英一

ハマスの攻撃を契機としたイスラエルのガザ攻撃は、幼児を含む無辜のパレスチナ人民がいくら犠牲になっても構わないという独善性や、ここに至る1948国連総会決議194（パレスチナ人の帰還権）、1967国連安保理決議242（ガザ、西岸地区など第三次中東戦争占領区からのイスラエル撤退）他の国際法無視を今さらながら浮き彫りにし、南アフリカの国際司法裁判所へのジェノサイド条約違反イスラエル告発にグローバルサウスからの支持が集まるなど、イスラエルへの国際的批判が高まる結果を招いている。

一方それに対するイスラエル政府高官の反応を見ていると、その自己正当化が単なる弁解ではなくある種の確信に裏打ちされていると感じる。例えばガザ攻撃当初におけるグテーレス国連事務総長の「ハマスの攻撃にはそれまでの前史がある」発言に対し、イスラエル国連大使が「恥を知れ」と本気でののしったこと等々。こういった反応の根底には、表立っては云われるないが、パレスチナ／イスラエルの地はユダヤ人が神から授かったという「旧約聖書」の「約束の地」神話による選民思想がある。

「約束の地」神話は進化論や考古学から虚構ということが分かる。しかしキリスト教世界では一定の説得力を持ち、19世紀末からのシオニズム運動の理念となったし、イスラエル建国時の残虐な民族浄化（ナクバ）におけるイスラエル人の良心の免罪符となった。イスラエルでは初等教育から「約束の地」神話が教えられ「イスラエル人は神を信じなくとも「約束の地」神話は信じている」と云われる。そういった教育が煮詰まった結果、イスラエルはカルト的極右政権が支配する事態に陥り、2018年には国内20%のアラブ国民を公然と差別し、内外多くのユダヤ人すら反対する「ユダヤ国民国家法」まで成立した。他者との対話ができない現在のイスラエルの姿は永年にわたる神話教育の結果とも云える。

ところで四国程度の国土面積と人口900万人弱の小国イスラエルが、周囲のアラブ諸国の敵意も含む国際的批判の中で、なぜ存続しえたかといえば、イスラエルに不利な国連安保理決議案に常に拒否権を行使し、年間30億ドルもの無償無鑑査の援助をイスラエルに行う超大国アメリカがあったからと云える。しかしイスラエルは石油産出地中東におけるアメリカの権益を守っているとされるが、冷戦も終わりシェール革命で中東の戦略的価値が低下した現在、イスラエルはアメリカの国益どころか負担になっているという指摘がアメリカ国内ですらなされている。

ではなぜアメリカはイスラエルを支持するのか。アメリカには有権者の四分の一、7000万票ともいわれるキリスト教原理主義の大票田があり、そこではキリスト教シオニズム、

すなわちイエスが再臨するにはイスラエルがエルサレムに新しい神殿を作らねばならず、そのためユダヤ教徒ならざるキリスト教徒もイスラエルを支持すべきだというカルト的教説が支配的になっている。したがって共和党のみならず民主党もその票田の意向に反することは困難な構造になっている（バイデン米大統領はかつてキリスト教シオニストを名乗った）。パレスチナ問題の真の病巣はアメリカのキリスト教原理主義者の大票田にある。

そのような大票田が生じた背景には、4割の人が進化論を信じていないアメリカ公教育の貧困がある。アメリカ憲法には社会権がなくしたがって教育権もない。アメリカの教育事情は州により、あるいは地域の税収により物凄い格差があり、世界最高水準の教育がなされる地域がある一方で、極端に劣悪な地域もある。公教育が機能していないことは、教育内容が客観的批判の場にさらされずカルト的授業がされ放題な状況を意味する。1968年の最高裁判決まで進化論を公立学校で教えることを禁じていた州も多々あった。今でも反進化論の大勢力が存在し、教育内容について熾烈な抗争がアメリカ各地で展開されている。キリスト教原理主義大票田の要因はアメリカの教育事情にある。

パレスチナ問題の背景には帝国主義・冷戦・民族差別・世界経済など複雑な要因があるが、イスラエルとアメリカの教育事情がその根源にあるのも現実である。教育の社会への影響力の巨大さが改めて痛感される。パレスチナ問題は、日本における教育内容の国家統制や、教科書問題などが何を意味するか、それに対抗することの意味と重要性を日本人に語ってやまないのである。

### 参考文献

- [1] I・フィンケルシュタイン／N・A・シルバーマン著、越後屋朗訳『発掘された聖書』教文館2009
- [2] イラン・パペ著、田浪亜央江／早尾貴紀訳『パレスチナの民族浄化』法政大学出版局2017
- [3] エリアス・サンバー著、飯塚正人監修、福田ゆき／後藤淳一訳『パレスチナ』創元社2002
- [4] 上坂昇『宗教からアメリカを考える48章』明石書店2023
- [5] シルヴァン・シペル著。林昌宏訳、高橋和夫解説『イスラエルVS.ユダヤ人』明石書店2022
- [6] 鈴木大裕『崩壊するアメリカの公教育』岩波書店2016
- [7] 立山良司『イスラエルを知るための62章・第2版』明石書店2022
- [8] ダニー・ネフセタイ著、永尾俊彦構成『イスラエル軍元兵士が語る非戦論』集英社新書2023
- [9] 早尾貴紀『パレスチナ／イスラエル論』有志舎2020